

ブルーノ・マンサーの死とプナン人の闘いの変貌

奥野克巳*

1. ブルーノ・マンサーの死

2000年5月、インドネシアとの国境からマレーシア領サラワクに潜入したブルーノ・マンサー(Bruno Manser)は、その後、現地のプナン(Penan)人たちから悪霊の住む場所として畏怖される、標高2000メートルの険しい石灰岩峰バトゥ・ラウィ(Batu Lawi)に単独で登ると言っ、プナンの友人と別れた後にふっつりと消息を絶った。その後、スイスの家族・知人やプナンの友人などによる懸命の捜索にもかかわらず、現在までブルーノの行方は知れない。ブルーノが1990年にスイスで設立したNGO、ブルーノ・マンサー基金(BMF)は、彼が消息を絶ってから一年後に、ブルーノが死んだ可能性が高いことを明かした。

彼の死は、スイスのターザン、ブルーノ・マンサーの名とともに記憶される、プナン人のブロックエイド(blockade: 森林伐採道路封鎖)による政府や企業との闘いの第一幕の幕引きを意味している。同時に、プナンを取り巻く社会変化を背景として、ブロックエイドを手段としたプナン人による闘いの第二幕の幕開けを示している。1990年から95年の休止期間を経て、1996年の再開後断続的に行われてきたプナンのブロックエイドは、2002年には一気に8箇所で行われた。以下では、筆者が2001年8月と2002年8~9月にバラム川流域のプナン人コミュニティで行った現地調査を踏まえて、ブルーノ・マンサーの死を一つの区切りとするプナン人の抵抗運動の変貌に

ついて報告したい。

2. ブルーノとプナン人の闘い

サラワク開発の起源は、サラワクを支配した白人王ブルック家の統治時代(1841-1941)にまで遡ることができる。先住民の首狩りや海賊行為を鎮め、地域平和を達成したブルック家は、1930年代になって地域開発に着手した。その後1946年から63年のイギリス統治下で、既存の土地立法を統合した1958年の土地法が、プナンにとって重要である。その中で、1958年1月1日以前にその土地に住んでいたなら所有権が認められるという原則が建てられた。この法制定は、森の中を移動しながらそれを共有地として利用してきたプナン人にとって森林に対する権利を制限することになった。これに対して、州政府は、1974年の土地法改正法を含めて、州内の森林を所有し、森林伐採のコンセッションを木材企業に配分する権利を得たのである。

1963年にサラワクがマレーシア連邦に加入すると、70年代後半にマレー半島で過伐による熱帯雨林の消失に対する警告が発せられ、森林伐採量が削減された。その減少分を補うために東マレーシアで森林伐採量が急増し、1963年から85年の間に、サラワク州は州の森林面積の3割を失うことになった。ブルーノは、そのような時代

* 桜美林大学国際学部助教授

に、1984年から90年までの間、森のプナンのもとで彼らの言語や習慣を学びながら過ごした。それは、プナン人が、80年代に木材企業の森への侵入に対して不満を募らせ、80年代後半にブロックエイドを頻繁に組織した時期と重なる。1987年3月に開始され、他地域にも派生した初期のブロックエイドの目的は、森林伐採に抗して生活領域としての森を守ることであった。ブルーノはその場面で、プナン人の相談相手となるだけではなく、自らのネットワークを活用して、欧米のメディアを森へと招き入れ、ブロックエイドに至る事情を世界に向けて発信し、森林伐採によるプナンの生活の侵害を国際的な関心事へと仕立て上げるのに重要な役割を担った。サラワク州首席大臣はブルーノを「国家の敵」と名指しし、彼を捕縛するために警察を派遣している。二度の逮捕から逃れたブルーノは、プナンとともに活動して州政府の標的となるよりも海外で活動する方が有効であると考え、1990年に母国スイスに帰国し、そこを拠点として活動を行うようになった。彼は、自ら設立したNGOの活動を通じて、スイスの約3分の1の自治体に熱帯材の輸入を認めない決議をさせるのに成功している。

ブロックエイドにより222人のプナン人が逮捕された1989年の翌年(ブルーノがスイスに活動の拠点を移した1990年)、サラワク州政府は、プナン人の窮状を救済することを目的として委員会を組織した。ブルーノが発信して広まった、自然環境破壊に対する国際的な関心は、国外からサラワク州政府の方向転換を促す原動力になったと評価することができる。90年代に入ると、サラワ

ク州政府は徐々に木材伐採量を制限したのである。

3. ポスト・ブルーノとプナン人の闘い

プナン人を支援するとしてサラワク州政府の約束不履行に苛立ったプナン人たちは、1996年に、90年以来休止していたブロックエイドを再組織した。その点で、再開後のブロックエイドは、初期のそれとは方向づけが異なる。プナン人は、1996年のブロックエイド再開後には、森林伐採に全面的に反対するというのではなく、適正な森林伐採とそれに対する見返り、住環境、医療環境、教育などの迅速な割り当ての要求を掲げて、ブロックエイドによる抗議行動を継続的に行うようになったのである。例えば、公共電力供給がないプナン人の村で電気を点けるためには発電機と燃料が不可欠であり、現状の生活水準を維持する目的で企業からの燃料などの供与を求めて、戦略的にブロックエイドが行われる。

プナン人の要求実現に向けて今日、重要な役割を担っているのが地元のNGOである。80年代末以降支援活動を行ってきたSahabat Alam Malaysia(マレーシア地球の友、略称SAM)、Borneo Resource Institute(略称BRIMAS)などがその代表格である(グローバルな市民社会のアクティビズムを構成する団体としては、先述したブルーノ・マンサー基金、アメリカのBorneo Project、日本のサラワク・キャンペーン委員会などがある)。とりわけ、プナン人の居住域近くに拠点を持つSAMは、プナン人と共同で政府に提出する資料づくりのための土地調査を行

い、プナン人たちに情報を提供して抗議行動を統合的に組織し、プナンが直面する問題を、ホームページを通じて世界に向けて発信している。

地元 NGO は今日、プナンを取り巻く社会環境の変化にも逸早く対応しようとしている。それは、1992 年に採択された生物多様性条約 (Convention on Biological Diversity) 以降の新たな危機への対応に色濃く現れている。生物多様性条約は、各国政府が生物資源に対して主権を持つとした点で重要である。サラワク州政府は、それに応じて、97 年にサラワク生物多様性センター条例 (Sarawak Bio-Diversity Centre Ordinance) を制定している。センターは、生物多様性をめぐる政策作成の支援および先住民の医療実践の記録と同時に、バイオパイラシー (bio-piracy) の監視を目的としている。ところが、センターの構想には、先住民の知的所有権に対する配慮がないという問題点がある [CHUNG 1996]。現状では条例に従って、センターからやって来る専門家に対して見返り (の約束) なしに、プナンは森の生物資源に関する知識・情報を提供するという役割を期待されている。加えて、生物資源を使用する場合は何人も使用料を支払わねばならないという州法に従えば (侵害した場合には罰金か懲役を科せられる)、先住民はこれまで使用してきた生物資源を自由に使うことができないことにもなる。現在、プナンは NGO などからの知識の提供を通じて、自らの知的所有権に対して自覚しつつある。

プナン人は現在、NGO と協力しつつ、複雑化する問題に目を配りながら、自らの権利に対する

適切な処置と地域開発への強い要望を掲げて、頻繁にブロックエイドを組織している。地元の NGO は、2002 年の 3 月末から 1 ヶ月間に相次いでバラム川流域の 5 箇所で行われたブロックエイドの組織と実行にも関わっていた。他方で、NGO は、政府から組織的なブロックエイドの扇動者ではないかと疑いをかけられている。集中的にブロックエイドが行われたことを重く見たサラワク州計画局 (SPU) は、2002 年 8 月に、ミリ市にプナン・コミュニティーのリーダーたちを集めてヒアリングを行った。その場で、ブルーノ以降プナン・コミュニティーの抗議活動に影響を与えたとされる NGO の役割が、政府から問題提起された。プナン人たちはいま、NGO との緊密な連携と政府・企業との交渉の間に揺れ動きながら、闘争の新たな局面に入りつつある。

4. ブルーノの霊

ブルーノがバトゥ・ラウィ方面に消息を絶ってからおおよそ二年後の 2002 年 3 月に、バラム川流域で、1996 年以来最大規模のブロックエイドが組織された。サラワク州のメディアは、プナン人が 80 年代後期に行ったような抗議行動を再開していると書きたてた。AFP 通信は、その一連のブロックエイドの背景には、フランス人、スウェーデン人、あるいはスイス人のアクティビストがいるという噂があることを伝えている。さらに、ブルーノの死が確実視されるなか、「ブルーノの霊」がブロックエイドに力を与えているという突拍子もない噂まである (AFP 2002.4.28)。このことは、プナン人のブロックエイドには、「高貴な未開人」に対する

熱い思い入れを持って、近代化への抵抗を組織する「白人」のイメージがいまだに取り憑いていることを示している。

プナンのブロックエイドは、伐採を阻止し、生活を守るための手段(ブルーノが国際的な関心を牽引した時代)から、政府と企業に対して生活水準の向上に向けた要求を通すための手段(ブルーノがいなくなった時代)へと変貌を遂げた。メディアがブルーノの死を取り上げ、ブロックエイドへのアクティビストの関与をほのめかすなか、プナン人たちは、一方では、森に深く依存する生活を守りながら、他方で、教育や医療サービスの拡充を求めて、NGO との連携を計りつつ、政

府・企業との交渉を通じて、近代化するサラワクの中で現実の生活を築く努力を続けている。

参考文献

CHUNG, F. J. 1996 “Interests and Politics of the State of Sarawak, Malaysia Regarding Intellectual Property Rights for Plant Derived Drugs”, *Journal of Ethnopharmacology* 51: 201-204.

ホン、イブリン 1989 『サラワクの先住民:消えゆく森に生きる』、北井一／原後雄太訳、法政大学出版局。

2003 年度 JAMS 研究大会・予報

日程: 2003 年 12 月 13 日(土)、14 日(日)

会場: 東京外国語大学(西武多摩川線多磨駅徒歩 3 分)

内容: 個別研究発表／パネル発表(開催校企画)／自由企画／会員総会など

個別研究発表の発表希望者は、①発表題目、②要旨(600 字程度)をご記入のうえ、Email もしくは郵便で 8 月末日までに大会委員までご応募ください。

パネル発表(開催校企画)につきましては、共通論題を設定したパネル発表を企画する予定です。その他に会員の皆様から自由企画(パネル発表、書評セッションその他)を立てたいというご希望がありましたら大会委員までお寄せください。自由企画をご希望の方は、①企画の題目、②趣旨(600 字程度)、③発表・コメンテーターなどの予定者名をご記入のうえ、Email もしくは郵便で 8 月末日までに大会委員までご応募ください。応募企画につきましては、大会委員・開催校・事務局で検討のうえ、9 月中旬(予定)までに採否をお知らせします。

大会委員:左右田直規